

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 8 日現在

機関番号：12102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K13482

研究課題名(和文) 自然会話の特徴への気づきに効果的な提示方法に関する研究

研究課題名(英文) A study on methods for using natural conversation to effectively promote learner Noticing

研究代表者

関崎 博紀 (SEKIZAKI, Hironori)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：30512850

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、自然会話の日本語教育での効果的利用方法を確立する一環として、日本語母語話者同士による雑談のビデオから、学習者がどのような気づきを得るか調査した。初級前半から上級までの4つの各段階の学習者に対し、ビデオを視聴させる、文字化資料を見せる、特定の側面に注意を向けさせるという3種類の提示方法で自然会話を提示した。その結果、ビデオを視聴させるだけでは気づきを促進しにくいこと、文字化資料の提示で、特に語彙や文法について深いレベルでの気づきを促せることが分かった。会話の特定の側面に注意を向けさせる方法は気づきの促進に最も効果的で、初級の学習者でも、一定程度の深い気づきが得られることも分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

外国人に対する日本語教育で、コミュニケーション能力の育成が標榜されて久しい。そのための有力な素材として、近年では、自然会話そのものを教材とすることが提唱されている(宇佐美2012)。自然会話には、対人関係の構築や維持に重要な要素が、豊富に含まれているからである。しかし、学習不安を助長する懸念などから、自然会話の教育現場での利用は広がっていない。その結果、利用の指針も整備が遅れていた。この悪循環を断ち切るために、本研究は、自然会話を日本語学習者に提示し、日本語の習得を促進できる部分とできない部分を明らかにした。よって、本研究は日本語の会話教育の新たな方法が開拓される端緒となる。

研究成果の概要(英文)：As an attempt to establish an effective way of using natural conversation in Japanese language pedagogy, this study investigates which aspects of interaction learners notice when they see a video of natural conversation between native speakers of Japanese. Three exposure tasks, namely simply showing the video, showing the transcript, and asking the participants to pay attention to specific aspect of the conversation, were provided to 24 Japanese learners, who were divided into 4 groups from the perspective of their proficiency. As the result, simply showing the video resulted in the least noticing. Transcript turned out to be the second most facilitative method for noticing, and its ratio of understanding was highest among the three methods, especially on vocabulary and grammar items. It was revealed that directing participants to pay attention was seen to be the most facilitative for noticing, and beginners showed certain ratio of understanding.

研究分野：日本語教育

キーワード：日本語教育 会話教育 自然会話 気づき 第二言語習得 中間言語

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

1980年代以降、伝達能力の育成を重視するコミュニカティブ・アプローチが日本語教育にも導入され、コミュニケーション重視の教育が標榜されてきた。そして、指導項目としての会話の技能、ストラテジーが研究・提示されてきた。そして、近年、自然会話そのものを教材とすることも提唱されている(宇佐美 2012)。その背景には、「ええと」、「あのう」などの、いわゆるフィラーや言いよどみ、「・・・なんですけど」のような、文を最後まで言い切らない発話など、対人関係の構築や維持に重要な役割を果たす要素が、自然会話には、従来の教材のように簡略化されることなく、豊富に含まれていることがある。

しかし、自然会話を教材として利用する方法は、整備されていない。例外的に、会話を文字化させることで、日本語の自然な会話に慣れていない学習者に対しても音声、文法、会話の構造などの多岐にわたる側面の細部にいたるまで気づかせることができることが明らかにされている(関崎 2009)。そこで、本研究では、この結果を追究し、他の提示方法による効果、及び、日本語力に応じた利用可能性を探る。言語習得プロセスはインプットに含まれる要素への「気づき」から始まる。そこで、自然会話の諸特徴に気づけるか否かが、一連の習得の鍵となる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本語教育の現場で、日本語による「自然な」会話を教材として利用する際の、日本語力に応じた適切な提示方法を解明することである。自然な会話とは、シナリオやロールプレイなど、事前に会話の方向性や結末が示されたものではない、その場で即時的に展開されていくやりとりを指す。これを教育に利用するのは、文法を中心に据えた教材では、冗長な要素とされ、しばしば簡略化されてきた、「自然な」コミュニケーションならではの特徴を豊富に含んでいるからである。提示方法は、ただ見せることに加え、文字化資料を示す、注目箇所を示唆するなど、複数ある。そして、それぞれに、学習者の日本語力に応じた効果が見込まれる。本研究は、効率的な日本語の会話教育に貢献する研究として、どの提示方法が効果的かを明らかにする。

3. 研究の方法

1)調査協力者は、いわゆるゼロ初級、初級後半、中級、上級の各レベルの日本語学習者、各6名、計24名である。レベルの基準を客観的に示すため、熟達度テストの結果を利用する。本研究では、SPOT (Kobayashi 2016)を組み込んだ100点満点のテストの結果、それぞれ0-30、48-58、75-82、90-100点を取った者とする。同テストは、筑波大学で開発され、オンラインで、無料で受験できる(TTBJ: Tsukuba Test battery of Japanese, <http://ttbj.jp/>)。

表1 調査協力者の出身

日本語力	出身
J1 (初級)	ペルー(2)、台湾(2)、中国、フィジー
J3 (初級後半)	中国(2)、インドネシア、メキシコ、ペルー、シンガポール
J6 (中級)	韓国(3)、中国、台湾、ウズベキスタン
J8 (上級)	韓国(3)、香港、台湾、ウクライナ

()内は人数

2)提示する自然会話のビデオは、非常に親しい大学生二者間による雑談で、フォローアップ・アンケートにより、記録を意識せず普段通りに話されたことを確認したものである。ここから、以下の ~ の方針に適合する1分48秒を抽出した。

発話が聞き取れ、非言語情報が読み取れること

前提として、ある程度明瞭な音声である必要がある。そこで、不明瞭な音声として、例えば、周囲のノイズが大きいこと、マイクで発話がよく捉えられてないこと、過度に滑舌の悪い発話、大きな笑いととも発せられた発話などを避ける。非言語情報を読み取るための、鮮明な映像として、逆光でなく、会話参加者がともに映像に映り、表情や体の向き、ジェスチャーなどが読み取りやすいものを選別する。

発話が平易なこと

発話が平易とは、例えば、話題が、多様な文化的背景から見てもある程度理解できるものであることを指す。そのため、個人的話題や専門的話題は避ける。また、言語変種にも配慮し、地域方言に関しては、大半の日本語教育現場で標準語にもとづく教育が行われている殊に鑑み、標準語が優勢な会話を利用する。社会方言に関しては、過度に若者言葉や集団語が多くない部分を選定する。

会話に見られる多様な特徴が含まれていること

実際の会話では、話者交替、交替時の発話と発話の間(ま)の長短、パラ言語、非言語行動など、フィラーや言いよどみなど、書き言葉にはない現象が豊富に見られる。また、口語的な語彙、特定の文法形式の音声転訛、言語形式上の変種も多くある。これらの特徴を種類、量ともに豊富で、なおかつバランス良く含んだ部分を選定する。

集中して何回も聞ける長さであること

繰り返しても集中して視聴できる長さとして、1～2分程度の部分を選定する。

3)協力者に課すタスクは、3種類用意する。ビデオに見られる自然会話の特徴を意識化させるには、注意を向けさせることが効果的である。そのため、注目する箇所を指示したうえでビデオを視聴するタスクを用意する。他方、いわゆる目型と耳型のように、聴覚からインプットを得て処理するよりも、視覚的なインプットの処理に長けた学習者もいる。この学習者は、会話を文字にして提示されると、注意資源を向けてビデオを視聴するのとは異なる部分を意識する可能性がある。そこで、視聴させるのと同じ会話を文字化した資料を見るタスクを用意する。文字化資料では、会話の分析に用いられる各種記号の使用はできるだけ避ける。表記は、漢字仮名交じりとする。ただし、日本語力の低い協力者のためにローマ字版も用意する。ローマ字表記の方法は、東京大学教養学部英語部会 / 教養教育開発機構(2009)に従う。これらに比べて簡便な方法は、単純にビデオを視聴させる方法である。ビデオを視聴させるだけでも、自然会話に含まれる各種特徴が意識化されるのであれば、簡便で利用しやすい。よって、ビデオを単純に視聴するというタスクも用意する。

4)協力者が得た気づきは、発話思考法(Think Aloud Protocol)、及び、必要に応じた筆記記録で収集する。言語化された各気づきについて、タスクごとに半構造化インタビューを行い、詳細を確認する。

5)収集した気づきについて、まず、提示方法ごとの数量的傾向を分析する。気づきの対象は、非言語情報、音声情報、文法、語彙、会話の構造、話題という6つの範疇を探索的に設ける。次に、各気づきが、表層的な言語事象に対する低次のもの(awareness at the level of noticing/lower level of awareness, Shcmidt,1993,1995, 2010)か、その言語事象の規則性や機能などに対する高次のもの(awareness at the level of understanding, Shcmidt,1993,1995, 2010)かを、気づきの対象、及び、提示方法ごとに分析する。

4. 研究成果

まず、表2に対象別に見た提示方法ごとの気づきの数量的結果を示す。

表2 対象別に見た提示方法ごとの気づきの数量的結果

	非言語	音声	文法	語彙	会話構造	話題	計
ビデオ	26 (12.6)	8 (3.9)	8 (3.9)	99 (48.1)	14 (6.8)	51 (24.8)	206
文字化資料	6 (2.1)	23 (7.9)	58 (19.9)	164 (56.2)	12 (4.1)	29 (9.9)	292
注目指示	142 (20.4)	100 (14.3)	116 (16.6)	163 (23.4)	147 (21.1)	29 (4.2)	697

注:()内は、気づきの数が各提示方法の合計に占める割合

表2から、協力者に、会話の特定の側面に注意を向けさせることで気づきが最も多く得られることが分かる。一方、ビデオを視聴させるだけでは気づきが得られにくいことも分かる。いずれの提示方法でも、協力者は語彙に関する気づきが最も多かったが、会話の特定の側面に注意を向けさせると、いずれの側面に関しても、大きな偏りなく気づきが得られている。特に、非言語情報、音声、会話の構造など、他の2つの提示方法では気づきが得られにくい範疇についても気づきが得られている。

次に、上記の結果を、協力者のレベルごとに確認する。さらに、各気づきに高次の気づきがどの程度含まれていたかを示す。次頁の表3に、協力者の日本語力、および対象別に見た提示方法ごとの高次の気づきの数量的結果を示す。まず、各提示方法が高次の気づきを伴う割合は、文字化資料で最も高く、次いで協力者に会話の特定の側面に注意を向けさせる場合、ビデオを視聴させるだけの方法で最も低かった。

協力者にビデオを視聴させると、語彙と話題に関する気づきが多かった。このことは、第二言語学習者が意味の処理をデフォルトとしている(Daughty,2001:214)ことを反映している。しかし、その規則性や機能への言及である高次の気づきは必ずしも多くない。高次の気づきは、文法や会話の構造に多いことが見て取れる。レベルごとの傾向では、高次の気づきは、J8レベルで最も多く、J1レベルで最も少なかった。

文字化資料を見せると、協力者は、理解の有無にかかわらず、文字化資料上の単語を読む傾向が確認された。また、ビデオを視聴させるのとは異なり、話題に関する気づきが少なかった。文字化資料は、特に文法に関する高次の気づきに効果的だが、J3、J6レベルの協力者では、その限りではない。一因は、当該レベルの複数の協力者が、教室外で見聞きした表現と、文字化

資料で見つけた表現とを、音の類似性だけを頼りに結びつけようと試みた結果、両者の違いに気づかないケースがあったことである。また、語彙に関しても、意味の理解を伴わない気づきも散見された。これは、文字が読めるために、たとえ意味が分からなくても、頻度の高さなどから気づきを得て、声に出すことなどが原因である。

表3 協力者の日本語力、および対象別に見た提示方法ごとの高次の気づきの数量的結果

	レベル	非言語	音声	文法	語彙	会話 構造	話題	計	
ビデオ	J1	1/5 (20.0)	0/2 (0.0)	1/2 (50.0)	18/38 (47.4)	2/3 (66.7)	0/11 (0.0)	22/61 (36.1)	87/206 (42.2)
	J3	5/17 (29.4)	1/2 (50.0)	2/2 (100.0)	8/12 (66.7)	2/2 (100.0)	0/5 (0.0)	18/18 (45.0)	
	J6	0/0 (0.0)	1/1 (100.0)	1/1 (100.0)	8/28 (28.6)	5/6 (83.3)	4/15 (26.7)	19/51 (37.3)	
	J8	2/4 (50.0)	3/3 (100.0)	3/3 (100.0)	12/21 (57.1)	3/3 (100.0)	5/20 (25.0)	28/54 (51.9)	
文字化資料	J1	0/2 (0.0)	0/6 (0.0)	13/13 (100.0)	20/40 (50.0)	0/0 (0.0)	1/3 (33.3)	34/64 (53.1)	153/292 (52.4)
	J3	3/3 (100.0)	1/4 (25.0)	12/17 (70.6)	19/47 (40.4)	4/6 (66.7)	2/10 (20.0)	41/87 (47.1)	
	J6	0/1 (0.0)	3/6 (50.0)	8/17 (47.1)	18/38 (47.4)	0/3 (0.0)	0/0 (0.0)	29/65 (44.6)	
	J8	0/0 (0.0)	5/7 (71.4)	11/11 (100.0)	25/39 (64.1)	2/9 (66.7)	6/16 (37.5)	49/76 (64.5)	
注目指示	J1	20/35 (57.1)	14/20 (70.0)	16/20 (80.0)	7/17 (41.2)	3/48 (6.3)	1/4 (25.0)	61/144 (42.4)	350/697 (50.2)
	J3	20/40 (50.0)	15/28 (53.6)	23/35 (65.7)	25/65 (38.5)	9/38 (23.7)	1/13 (7.7)	93/219 (42.5)	
	J6	18/32 (56.3)	13/22 (59.1)	19/37 (51.4)	29/54 (53.7)	10/42 (23.8)	2/7 (28.6)	91/194 (47.4)	
	J8	25/35 (71.4)	24/30 (80.0)	22/24 (91.7)	18/27 (66.7)	12/19 (63.2)	4/5 (80.0)	105/140 (75.0)	

注：各範疇の「/」で区切られた数値の左側は高次の気づき、右側は気づきの総数を表し、()内にその割合を示す

会話の特定の側面に注意を向けさせると、高次の気づきが得られる割合は、J8 レベルで最も高く、J1 レベルで最も低かった。しかし、文法に関しては高い割合で高次の気づきを得ているは、J1 レベルの協力者が既習の文法項目については、意味や規則をよく理解していたことを表している。J3 レベルでは、文法に関して高次の気づきが最も高い割合で得られているのに対して、語彙に関しては4割以下にとどまっている。一方、J6 レベルでは、会話の構造と話題を除くすべての範疇で高次の気づきが50%以上の割合で得られている。J8 レベルでは、全ての範疇において60%以上の割合で高次の気づきを得られている。

以上の結果から、ビデオを視聴させるだけの提示方法は、最も簡便ではあるものの、他の2つの方法に比べて気づきに効果が低いと言える。しかしながら、話題に関して多くの気づきを得られていることから、日本語母語話者同士の会話における話題を知るなどの用途では利用可能であろう。文字化資料は、自然会話の文法と語彙に気づかせるのに有効である。しかし、自分のペースで目を通せるという文字化資料の性質上、意味や用法を理解していない文法項目や単語にまで気づくことが、特に初級後半から中級において観察された。よって、この点のコン

トロールと、学習者が気付いた事柄に関する解説が必要であろう。会話の特定の側面に注意を向けて視聴させる方法は、他の提示方法では気づきにくい非言語情報や音声、会話の構造なども含めて気づきを促進した。高次の気づきが得られる割合も比較的高いものの、非言語情報や会話の構造などについては、その割合が低いことから、補足的な指導が必要であろう。

参考文献：

- 宇佐美まゆみ(2012)「母語話者には意識できない日本語会話のコミュニケーション」野田尚史 編『日本語教育のためのコミュニケーション研究』pp.63-82, くろしお出版
- 関崎博紀(2009)「日本人同士の「生の会話」を利用した会話教育」『筑波大学留学生センター 日本語教育論集』25号、pp.1-16
- 東京大学教養学部英語部会 / 教養教育開発機構(2009)「日本語のローマ字表記の推奨形式」 (<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/eigo/UT-Komaba-Nihongo-no-romaji-hyoki-v1.pdf>、2020年6月6日閲覧)
- Daughy, C. (2001). Cognitive underpinnings of focus on form. In P. Robinson. (Ed.), *Cognition and second language instruction* (pp.206-257). Cambridge: Cambridge University Press.
- Kobayashi, N. (2016) Japanese Language Proficiency Assessment with the Simple Performance Oriented Test (SPOT) as a Primary Focus. In Minami, M. (Ed.), *Handbook of Japanese Applied Linguistics*, pp.175-198. Berlin: Walter de Gruyter Inc
- Schmidt, R. (1993). Consciousness, learning and interlanguage pragmatics. In G. Kasper, & S. Blum-Kulka. (Eds.), *Interlanguage pragmatics* (pp.21-42). New York: Oxford University Press.
- Schmidt, R. (1995). Consciousness and foreign language learning: a tutorial on the role of attention and awareness in learning. In R. Schmidt. (Ed.), *Attention and awareness in foreign language learning* (pp.1-63). Honolulu, HI: University of Hawaii Press.
- Schmidt, R. (2010). Attention, awareness, and individual differences in language learning. In W. M. Chan., S. Chi., K. N. Cin., J. Istanto., M. Nagami., J.W. Sew, T. Suthiwan, & I. Walker. (Eds.), *Proceedings of CLaSIC 2010*, (pp.721-737). Singapore: National University of Singapore, Centre for Language Studies.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 関崎博紀	4. 巻 24(2)
2. 論文標題 自然会話の特徴への気づきに効果的な提示方法の研究 中上級とゼロ初級の各レベルの学習者の対比から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本語教育方法研究会誌	6. 最初と最後の頁 4-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.19022/jlem.24.2_4	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 関崎博紀	4. 巻 26(2)
2. 論文標題 自然会話の特徴への気づきにおける日本語学習者のレベルによる異同-文法に注意を向けて得られる気づきの質的な分析の結果から-	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本語教育方法研究会誌	6. 最初と最後の頁 54-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 関崎博紀
2. 発表標題 自然会話の提示方法に応じた気づきに関する実証的研究 - 第三世代の会話教育方法構築のために -
3. 学会等名 筑波大学日本語・日本事情遠隔教育拠点シンポジウム2019 『未来志向の日本語教育』
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 関崎博紀
2. 発表標題 自然会話の特徴への気づきに効果的な提示方法の研究 中上級とゼロ初級の各レベルの学習者の対比から
3. 学会等名 日本語教育方法研究会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----